

時の旅人

歴史の舞台へ人を誘う
第7章

日本二十六聖人殉教者 裸足で歩いた千キロ、「長崎」への道

京都・大坂で捕らえられた二十四人のキリシタンたちは、
厳寒のなか、処刑地となる長崎までの長い道のりを約一カ月間、裸足で歩かされた。
そして、道中で加えられた二人を合わせた二十六人の命は、「西坂の丘」で果てた。
この殉教の丘には、歴史のなかに散った命が語りかけるメッセージがある。

長崎が処刑地とされた理由

十六世紀後半、貿易港として開かれた長崎は、南蛮船が行き交い、教会が建ち並ぶキリシタンの町であった。豊臣秀吉は、この港と町からよく見える西坂の丘を処刑地を選び、京都・大坂で捕らえたキリシタンたちをひたすら歩かせて、最期はここで十字に組んだ木に磔にした。

「スペインはキリスト教の宣教師を派遣して信者を増やし、やがてその国を征服する。」土佐浦戸に漂着したスペイン船サン・フェリペ号の航海士の話として報告を受けた秀吉は激怒。宣教師たちへの見せしめとキリシタンの町への警告のために、長崎までひきまわして処刑することで、自分のキリスト教に対する考えを世に示したのである。

西坂の丘から発信されるメッセージ

一五九七年二月五日、四千人の群衆が見守るなか、日本人二十人と外国人六人は十字架の上で、槍を持った役人に次々と両脇を突かれて昇天した。日本で最初の



聖堂の壁面に施されたモザイクの陶磁器

この大殉教事件は、やがて処刑された外国人の故国ポルトガルやスペイン、メキシコをはじめ、イタリアや北ヨーロッパなどにも伝えられ、大きな反響をよぶ。そして、日本ではまだキリシタン迫害が続く一八六二年、彼らはローマで聖人に列せられたのである。

列聖百年にあたる一九六二年、西坂の丘に記念碑、記念館、聖堂がつくられた。二十六人の聖人を彫刻した記念碑をよく見ると、二十四人は天を仰いでいるが、二人だけが視線を下に向けている。「碑の前で観る人と視線が合うことによって、その人の心を上へと引きあげるように」と制作者は語った。また、記念館と聖堂に施されたモザイクの陶磁器には、彼らが歩いた京都から長崎の道のある窯元で焼いたものや、故国から贈られたものが使われている。

西坂の丘で殉教した二十六人は聖人に列せられた。
その命をかけた信仰を讃える記念碑のそばには、
彼らが召された天国を指し示すように
聖堂の双塔がそびえている。



■記念碑の制作者
彫刻家 故舟越保武氏
■記念館・聖堂の設計者
建築家 故今井兼次氏

「旅する長崎学」第三号で、日本二十六聖人殉教者を詳しく紹介しています。